

良様の御配慮になった事を、後日私に漏らされていた。その翌年まで三ヶ月老齡の法主さまは過勞の爲、私の自房に居を移され京都大学病院に先生と早川主事を伴って御入院遊ばし、全快して米寿を迎えられたが、明けて昭和三十二年二月御遷化遊ばした。其の後、私は身延駅で先生に御会いた時、お互に触れ合った眼と眼の感じは懐かしさとお瘦せになられた先生への直感であった。新校舎建設の大願の爲に、かなりの御疲勞と御心使いを感ぜざるを得なかつた。それが最後の御別れになろうとは居ても起つてもいられぬ気持ちで胸に迫る想である。

(身延山地方執事)

凡て是れ修行

秋 山 智 孝

学院の松木先生を知ったのはまだ小学校入学前の様な気がする。とするとかれこれもう四十年にもなる。知ったと云つても名前だけであつた。その頃私には何時も二、三人の学僧が居り兄弟同様の生活をしていた。彼等の間では自然と学校の話が話題に上る。学校の話に先生はつきものだから聞くともなしに先生の名前を覚えてしまう。母などは先生方のニックネームと本名を取り違えたりして笑われたりした。当時学僧達の話だと松木先生は何でも弁舌巧みで、不治の病になつたが死を覚悟して布教に専心したら不思議な事に病気が治つてしまつたと云う事で話の雰囲気

から偉い先生とは云っても何か親しみ易い人の様な気がした。それが何年かして学生の頃になり、極くまれだったが上沢寺での葬式で代務住職の先生に接して見ると、謹厳そのもので眼鏡の光るのも与かって一寸近より難い感じの子供の頃のイメージが破られてしまった。尤も学僧達の話からかれこれ十年近い年数が経っているの、先生御自身も大部変られていたのかも知れない。

戦争が終り私の住職生活が始まったが、私のところは村の中央であるため何時も戦死者の合同葬の会場に当てられていて、時には各宗合同の時もあった。勿論本宗の法要が中心であった。また上田先生若年のため合同葬に上沢寺関係の英霊のある時は先生が見えられた。何時も導師は先生に御願したが、弱った事は戒名を見られる事であった。合同葬であるから当然私の寺の英霊もあるため、嫌おうなしに戒名を見られる事になる。今の若い者は戒名のつけ方も知らないなどと思われはしないかと冷や冷やものだった。然しいざ法要になって先生が莊嚴に読み上げると何か立派な戒名に思われほっとした。ある時法要が終りお茶を呑みながら、山の学校も色々な事情で先生が足りないで困って居るが出校しないかとのお話であった。余り突然の事でもあり何と答えてよいか分らなかったが、私は元來教師になる様な柄でない事、学問もおそまつである事、等の理由を挙げて辞退し話はそのまま帰られた。

しばらくして先生からの封書が届き、是非共至急出校せられ度しとの事、母に相談したら、無事復員の御恩返しにお祖師様に仕えさせて頂く気持ちで御手伝いしたらと云う事になり、意を決して学校へ出向する事になった。

その頃占領軍は軍国主義者追放に極度に神経を使っていた。幸な事に職員の中では誰もこれに該当する者がなかった。ところが大変な事に松木先生は戦争中翼賛会に関係したと云う事で教職追放と云う事になった。学校を去られる時の先生は大変淋しい様子だった。爾來先生は本山での布教活動に専心される様になり学校とは直接関係のない立場

になった。

何年かして藤井法主様が御入山になり内局更迭に伴ない再び学校にもどられた先生は玄関わきの部屋を自室とされた。大げさな云い方かも知れないが本山の表舞台の生活に比べて学校は地味なところ、もとの古巣に帰ったと云うものゝ、「学校が一番いいよ」と云われる先生の様子を見ると、何かしら一抹の淋しさが感ぜられた。爾来選化されるまでの約九年間先生の下で生活する事になった。さて一諸に学校生活をして見ると、今まで考えて居た先生とは大ぶちがった点がある事に気がついた。

時々洒落を飛ばしたり意外と愉快な面があり多年の間心中に抱いていた先生観が又も破られた。何時も黙々としてゐる先生は何か維摩の一点を連想させるものがあり、私達には測り知れない何かある様に思われ又それが或る種の距離を感ぜさせた。

先生は何時も学生に「諸君は何時も修行と云う事を忘れてはならない。鉛筆一本削るのも修行である」と訓されたが、そうした厳しさが先生の黙然としたものに通ずる何かがあつたのかも知れない。

先生は塩田先生が選化され非常に気を落されて急に年をとられた様である。特に一昨年頃から目に見えて元気がなくなり、好きな酒も少量になった。

一昨年の教育実習の際身延中学の校長室で「秋山君俺が死んだら来てくれるかい」と云う突然の言葉に驚いた。「来るなど云つたって行きますよ」と云うと「そうか」と笑つて居られたが、それが去年の教育実習の時にも同じ場所と同じことを云われた。「俺が死んだら学校の先生達で葬式をしてくれ、ばいよ」と力強く云われたので「まさかそんな訳には行きません」と言をさえぎつたものゝ、先生の氣力の弱まった事に愕然とした。

凡て是れ修行、先生は既に死期を悟られて居たのかも知れない。秋の教学大会にはぼうぼうたる髭のまゝ、坦上に立たれ、この会に遅刻するとは何事かと叱正激励された。これが最後で間もなく入院された事を知ったが、遂に病床を御見舞する事も出来ずにしまった。まさかこんな急に遷化なされるとは思わなかつた安易の氣持の致すところ申訳なく思われてならない。

凡て是れ修行だぞ、今も先生は私達に呼びかけて居られる事だろう。

師の御靈旅立つ朝雪浄土

(本学教授)

老師の微笑

大 森 孝

私が松木先生に初めて御会い致したのは、約十年前でした。当校に勤務する事になりまして、里見先生に案内して戴き、本山の先生の御部屋に御挨拶に伺いました。当時、先生は学頭、及び本山で教学部長をして居られました。私も上司と初めて会うので少々緊張して居りました。初めて先生と視線が会った時、大きい眼で、ぎょろっと見られたので、少々こわい感じが致しました。しかし、私の生地が、都留市である事から、先生の御親戚も都留市にありましたので、種々話はずみ、帰る時には、以前から存じて居る様な、非常に親しい氣持になって居りました。